県産竹類の工芸的利用

デザイン開発室　宮　内　孝　昭

1．はじめに

本県は，全国有数のモウソウチクの生産量を誇りながら竹製品を見ると先進地，大分・京都からの立ち遅れは否めない。しかし，一部編組品については，県外大消費地からの注文に応じきれないといった所もあるようだが，その他の竹製品全般については竹主要産地鹿児島のイメージがもうひとつ弱いように思われる。そこで，今回は，竹集成材の付加価値を高めるための研究と竹表皮を生かした製品の試作を行った。

2．開発とプロセス

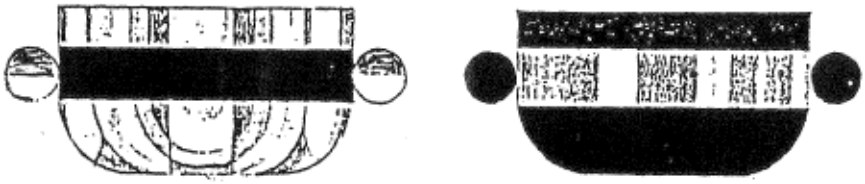
2．1　竹集成材製品の開発研究

(1)　目的

家庭の食卓で日常使われるような集成材製品という観点から，多目的に使用可能な器を設定し，これらに対する着色パターン研究を試みた。

(2)　着色パターンの検討

球状の取っ手と黒のカシュー塗料の塗り込み部分をデザインのポイントとした（図1）大（サラダボール）を2点，小（小鉢）を10点の試作を行い，竹集成のパターン特性（美しさ）を生かせるよう，着色面積，パターンについて様々な検討をした。また，若者にも受け入れられるようカジュアルな雰囲気を出すために竹集成材でつくった球状の取っ手を付けた。ただし，使用色については，色彩による評価バラツキをさけるため無彩色の黒を使用した。



（図1）

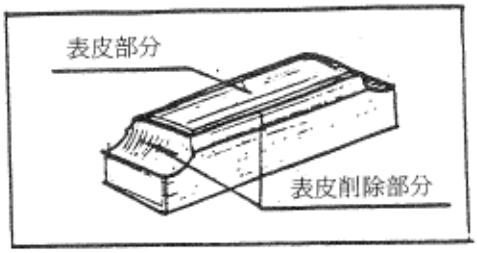
2．2　竹表皮材を利用した製品の開発研究

(1)　目的

竹表皮材の特性である独特の色・肌ざわり等の持ち味を生かした活用方法を考察し，装飾素材として，杉ロクロ材との複合製品の試作及び塗装着色の可能性について検討した。

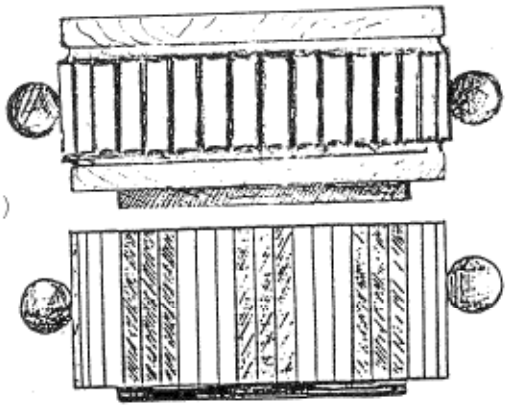
(2)　装飾素材としての検討

竹表皮材を小ブロック（図２）のようにして杉材ロクロ製品の側面に接着したところがポイントである。その表皮削除部分と表皮部分の連続パターンの美しさを狙いとした加工を施した。



（図２）

（図３）



また，竹表皮への彩色を試みた。竹表皮の色調（トーン）は，地味なライト（弱い）トーンであるが，これを様々なトーンの色と組み合わせてみたところ，同じ地味なトーンの色と調和することが掴めた。色相としては，グリーン系とパープル系の色がよく調和するように思われた。今回の試作は３点スタッキングにデザインしたため，収納時にも美しく見せるために調和し，食卓でも違和感を感じさせないであろう色を選んだ。具体的には，青紫系のサルビアブルー・青緑系のターコイズ・黄緑系のエバーグリーンの各色のカシュー塗料である。（図３）

３．結果と考察

３．１　竹集成材製品の開発研究

今回試作のサラダボール・小鉢のセットについては，カシュー塗料を施し，付加価値の向上を試みたが，反面，集成模様を塞ぐことになるので，カシュー塗料の塗り込みパターンの幅は十分に考慮する必要がある。最近では，市場においても食器等に鮮やかな色が使われ始めており，カシュー調合色，様々な染料等を用いることも考えられる。

3．2　竹表皮を利用した製品の開発研究

竹表皮材利用のスタッキング式小鉢については，低コスト材を利用し竹表皮との調和や竹表皮への部分彩色による付加価値向上を図る狙いであったが，杉材・表皮ブロック材・カシュー調合色の３者の均衡がとれず，手間もかかった割には付加価値向上が困難であった。器（木部）と竹表皮材との調和・均衡や，竹表皮材そのものの装飾材としての使用方法について，今回のような，ブロック材の接着・加工の困難性，仕上がりの評価についても期待したような効果が得られず，その利用については今後，十分に検討する必要がある。また，カシュー調合色の表皮材への塗装については，時代に即した製品にしてゆくうえで必要になってくることであろうと考える。

4．おわりに

竹表皮材及び木材より高コストの竹集成材を，今後いかにして有効利用していくかということが大きな課題である。そこで，新製品開発を考えるうえでの留意点としては，竹らしさを生かした塗装仕上げ・歩止まりの良さ・良いスタイリングといったことを十分考慮したデザインが必要になってくると思われる。そのような点をポイントとして，今後，竹集成材や竹表皮を使った製品のイメージを多様にクリエイトしていく方策を検討してゆきたい。また，異種材との組合せによる付加価値向上といったことも集成材製品のイメージアップに役立つ方向と考えられるため十分研究する必要があると考える。